
あかねさす（父のこと）

本間有明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかねさす（父のこと）

【Nコード】

N3931F

【作者名】

本間有明

【あらすじ】

一介いっかいのサラリーマンだった父の葬式の翌日、父の短歌集を読んでいた僕は、最初に読んだ時には読み過ぎてしまった一つの歌に目をとめた……。

「母さん、あの時、何て言ったんだらうね？」
病院の食堂の冷めたハンバーグをつつきながら、僕は姉にたずねて見た。

「… なんとかの松… とか… どこかの松のところ… ・なんて言ってたような気がするけど、それって何のこと？」
姉にも何のことだか、よくわからなかったらしい。

「… いつか機会があったら、母にたずねてみよう…」などと、その時は、ぼんやり考えていた。

つい先ほど、この病院の一室で、父が、家族や孫たちに看取られて息をひきとったばかりだった。

数ヶ月前から肺癌で入院を繰り返していたが、八十一才ともなれば、まわりの者たちもある種の諦めがつき、末っ子の僕などは、一ぼろぼろの肉体を離れて今ごろはやっと楽になったことだろう… などと、あまり悲しい気持ちにもならずにした。

ただ、やはり長年連れ添った母は、そんなふうに行くはずもなく、手つづきどおり医師が臨終を告げると、父の胸元に顔を近づけて、さすがのように語りかけた。

「… 良い孫や子供たちに囲まれて幸せでしたね… の松の所で待っていて下さいね。私もすぐに行きますから…」
そして、暫し父の胸から顔を上げ得なかった。

それは、僕が初めて見るような、父母の男と女としての姿でもあった。

父は、普通のサラリーマンとしての四十年にわたる勤めを終えると、定年後は好きな短歌を作ったり、長男や友人と囲碁を打ったり

して、そこそこ幸せな余生をおくつたと言つてよいだろう。
葬式の翌日、僕は、暇にあかせて父の二冊の歌集を読み返してみ
た。

フツで幸せだったはずの父の一生を短歌で降り返つてみると…

佐渡をのぞく新潟に雪降るといふ

さらば槍など降るとや佐渡は

父は、新潟県佐渡郡相川町に生まれ、事情により剣道師範の養父
に育てられた。

竹刀をからませて暫し見据え合ふ

血のつながらぬ父と子にして

連れ子して後添いに入りしあはれなど

思ひ見ざりき母を責めにき

ゆえよしはさだかならねどわが頼に

その夏父の熱き打ちやく

中学を出て三重県伊勢市にある神宮皇学館に入学、短歌に熱をい
れる。

後に知つたのだが、父の、縁のうすかつた実父は隣県 和歌山の
人であつた。

二千五百円と引き換えに売らるる女の声

もれ聞こゆるに心打たれき

明日はもや売らるるらむか隣室に

家救う娘の寝息かそけし

(この二首は二十才そこそこの頃の歌)

昭和十五年に旧制東北大学法科に入学、その後、召集されて兵隊

として北支（中国）に三年暮らした。

面伏せて自閉のさまに歩みいき

四十年前開戦の日も

武装なき敗余の兵ら民衆に

石打たれては列を乱しき

耳去らず軍靴の音の聞こえて

忌避のすべなく夜を彷徨う

終戦後、金属関係の会社に入社、結婚して三人の子供をもつけ、同社に四十年あまり勤めた。後年、某地方都市へ製造所副所長として単身赴任している間に、思春期に達した子供たちの造反劇がはじまった。

長兄は学生運動に没入し沖縄返還闘争の時、火炎瓶所持容疑で逮捕投獄され私服の刑事が隣近所に聞き込みに来たりするようになる。その下の娘は、今ではメジャーになった情報誌の発刊に参画し、ライバル誌との生き残りをかけて、給料も出ないのに手弁当で仕事に通う毎日。

ちなみにオイルショック後の紙の高騰により、百円で売る本を作るのに百三円かかっていた時代である。

一番下の息子は、高校時代から時々シンナーの匂いをさせたりしていたが、そのうちロックバンドを作って、妙な格好で出かけて行つては夜中に男女の友人を連れて酔っ払って帰って来るようなことが多くなった。

注意する母を、気が狂ったように怒鳴りつけたりしていたが、せっかく入った大学もやめ、家を飛び出して寄り付かなくなった。口インだけ残して……。 (お察しのとうり、この最悪のバカ息子が僕です。父さん母さん、ごめんなさい)

母に言わせると、この頃が「一番の地獄」だったらしい。そりゃ

そつだろーそつ言えは多作な父にしては子供たちを歌つた歌は非常に少ない。子供らは苦勞のタネ、歌のネタにはならなかつたと言ふことか？こんな歌さえある。

雪の来る倒木たつぼくのかけに石枕いしまくらきて

妻と果てなむ 母さへなくば

重めの歌ばかり選んできてしまったが、こんなユーモラスなものもある。

あじさいの葉にいて角をふる蝸牛かぎゅう・かたつむり

おまへが国を憂うれいて何とする

誇り高く本を枕に眠りいる

ヒゲのホームレス冬が来るぞよ

このような歌を読む時、まるで自分に向かって言われているような気になる。思い過こしか……

父の作歌活動は大学入学から現役引退までのほぼ四十年間中断。(この間のことを読んだ歌はみな後年の作) 生きるのに精一杯だったと言ふことらしい。

この後、姉に双子の男の子が誕生した。

向むかつ家やの犬ほ吠わゆるなり孫二人

わが門口かどぐちにあらわる時刻とき

奔放ほんぱうに絵えをかく子こらを見てあれば

この昼のまま時移ときうつりらざれ

会社での最後の数年間、リストラの首切り役として辛酸をなめた
と言つ。

若きらにうとんぜられておらむなど

酔いて歸りて妻には言わず

構内にパンジーは群れて笑くとも

資本の側に連帯はなし

世すぎゆえ耐えよと言へどたはやすく

癒えて忘れむ傷ならなくに

引退後の父は、おおむね平穩に暮らしたと言つていいだろう。趣
味の囲碁の歌に幾つか面白いのがある。

この人より何が劣るや黒白の

つきし盤上に日脚のびつつ

執着は無き筈ながら寝につきて

昼の負け碁の石絡みあふ

男どもに妻の託せし夢ちりじり

共犯者めきて子と碁を囲む

父の実母は平成元年に九十七歳の高齢で亡くなった。

死に近き母が何とて子供らに

笑みつくるいて はい と答ふる

み仏になりゆく母を呼びもどす

愚かにわれが声はげまして

冷え切らぬうちにおん身を背に負いて

故里の島に歸らむか母よ

新盆。

亡き母が庭をまはつて縁えんにいる

そこがよければいつまでも居よ

たそがれは天の恵の恍惚こうこうに

遊ばむわれも母の子なれば

晩年の父の作風は、ようやく軽妙けいみょうの域いきに入り独自の世界をかいま
見せる。

浅草のガマの油に立ち止まる

ご用とお急ぎのないひとりにて

自販機に入るる煙草を見て佇たてば

飽あかで別れしピース茄子紺なすこん

薄皮をつるりと剥むきて桃尻ももこに喰らいつきたり

御免とも言わず

水族館大回遊の水槽の

割れむ日を待つー魚ら一同

留守の間にお手打ちに合あひし侘助わびすけの

素すつ首ひとつ本箱の前

個人的には次の二首のようなジャンル不明の歌も好きだ。

遺伝子いでんこを人の利便りべんに組み替かへて

づかづかと神の領域に入る

舗道ほより見ゆるエレベーターに

少女しょうじょいて鳥籠かごのごと降おろされて来る

広島ひろしまの被爆者ひばくしゃながら剽軽者ひょうきんもの

いんでもろては困こまるのがいる

友人のTさんを詠よんだ歌である。

母によると、亡くなる一週間ほど前、眠りからさめた父が、

「今、Tがここへ来て、話しをしていたんだ。」
と言ったそうだ。

Tさんはその頃、広島で闘病生活をおくっていたが、奇しくも父と同じ頃亡くなられた。

生前、二人が旅行に行った時のように、旅の打ち合わせは済んでいたのかもしれない。

最晩年

どの部屋にも妻の居おらねば庭も見

斯かかる日も来む先立たねば

一つ根に二本の竹が並び立ち

一竹枯れぬ冬に入る前

名月とて月下美人は咲きをりぬ

隣家の老の逝いきしころほひ

父が妻、逸いっ子を歌った歌はさすがに多いが、二人の関係は、昔の人たちらしく、べたついたところが少しも無く、僕などは子供心に「この人たちは本当は仲が悪いんじゃないだろうか…」などといぶかしんだ覚えがある。

指先のあぶらが切れてひび割れし

妻へたりいる薬ひろげて

些ちかかの酒に疲れて軍門に

降るがごとく妻に降りく

水細き大河をひとつ渡り来て

その名を逸すまた逢はざらむ

そして一冊目の歌集『佐渡』の中ほどに、最初に読んだ時には読み過ぎてしまった、こんな歌を見つけ出した。

海に向く坂のかたへの松丘に

まつはりて遠き秘事ひとつ

辞世の歌などは、もとより無いと思うが、もしも勝手に選ばせていただけるなら、次の一首など父らしくて良いと思う。さようなら、おやじ。

人はいさわればさ思ふぬけぬけと

世を欺きて一生終へなむ

追記

現在、佐渡相川の海を見おろす松林のほど近く、父の菩提寺の境内、桜の木のそばに沢山の方々の御骨折りと御厚意により、父の歌碑が建てられている。

生前の父を、私などより、よほどよく知っておられた所属短歌会の皆様が、その石碑のために選んで下さった歌は

さいはての遠流の島に生れしより

われに無常むじょうの海鳴なみやまず

また、関西支部の皆様が推薦して下さったのは、『二冊目の歌集』
橋川』の最後に収められた次の歌でした。

父になりかわり、あつく御礼申しあげます。

あかねさす彼岸桜ひがなづくらをふりかへり

逝く春いが惜おしわが齡よわい惜し

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931f/>

あかねさす（父のこと）

2010年10月28日05時25分発行